

は、此鳥とても何ぞ六ヶ敷事もなく、常のひよどりと同様の心得にて、初から五分餌にて日々何度と云數なく、巢ふこの内不殘口を割申節、直に餌をさし、其内口をわるも有、割ざるも有時はささざるとの嘶を傳へ聞、何れにも鳥は手六敷なき方にて、其鳥能く進み、時も見事に仕舞、年を重ね飼たる人が上手也、何にも皆利有ども、拙には無口にて能キ方を聞覺度、此鳥生立方、右之外にも功者あまた有、我ト玉子を産せ、我ト生立る程の功有る人もあり、此鳥あまり見事の羽ぶりもなく、のぞみみても薄く、鳥のあたへも下直ならば、さのみ功者も入間敷、たとへば常のひよどりの子を生立方にも、差而心苦は有間敷、初而鳥鶉の生立方ならば、人にも尋、我も工夫も可有事、先は何鳥にても子を生立、三度産巢の親鳥を求る節は、先其年の雛鳥を致調達、翌春より巢組に掛り度、直に子を生立取ル考にて、親鳥の産巢致吟味候而も、鳥主段々と試もはや古鳥にて産あがりたる鳥か、又若鳥にても番不宜鳥を手放シ可申候、此處は鳥數寄の大切所也。

〔食物和歌本草〕鶉

ひよどりは其能毒はきはめねどいかさま氣をば補やせむ　ひよどりは寒空又は水をはひていさめば性は温と見えにき

〔武江産物志〕山鳥類

ひよどり、鶉、本所

〔三代實錄〕

清和

貞觀六年九月廿日己丑、有鶉當宮城而翔翔。

〔古今著聞集〕

十六

同卿藤原

の許に、權寺主圓慶といふ僧侍りけり、件の僧ひよどりをかひ

けり、毛をおそくかへけるを、いろくしき物にて、其鳥をとらへて、毛をつるりとむしりてげり、二品きかれて比興の事に思ひて、歌をよみて、ふだにかきて、壬生の辻に立られける、

ひへ鳥をむしりつゝ、みのはたかはらえりすゝにしてなほわたるなり

〔古今著聞集〕

二十

禽獸

宮内卿家隆卿ひぎょうのひよどりおぎのはといふを、子息の侍従すみよし